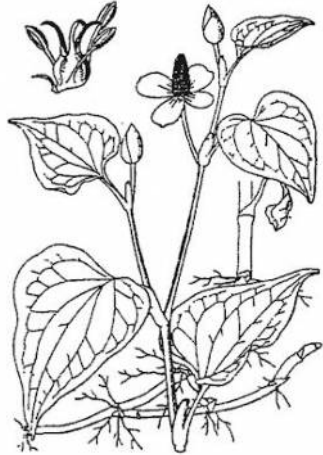


ドクダミ Houttuynia cordata



ドクダミ (牧新 674)

あしたより雨くらく降る庭隅に とぼとぼ目立つどくだみの花 土田耕平

嫌われながらも、一方民間薬として古くから用いられてきた。葉に‘デカノイルアセトアルデヒド’が含まれていて抗菌性があり、中国では解熱、解毒、利尿、湿疹の治療に用いられている。日本でも古くから腫れ物、虫指され、切り傷、洗眼、駆虫、皮膚病などに民間薬として広く用いられていた。駆虫といえば、人糞尿に湧く‘うじ虫’を退治するのに、大いに役立っていた。

便所や溜池に茎葉まるごと投げ入れただけで、効果的面だった。

十種め薬効があるということから、一般に‘十薬’とも呼ばれている。しかし、これは故事附けた解釈で、漢名の「蔽薬」の蔽と原音が同じ十を当てたまでのことである。

北アルプス山麓の農山村では太平洋戦争のころまで、年中行事として八月に‘薬草採りが行われ、オオバコ、ゲンノショウコと共にドクダミも大いに採集されたという。このような行事は北アルプス山麓に限らず全国で古くから行われていた。奈良時代には‘薬狩り’といって国家的儀式だったという。この薬草の中で最もポピュラーなのがドクダミであった。この史実は十薬という名が方言名となって、全国津々浦々に広く伝えられていることから充分頷ける。

なおドクダミは山菜として、また列記とした野菜にもなっている。ベトナムでは野菜として畑で栽培され、市販されて多くの料理に用いられている。

葉や茎は生では臭くてやりきれないが、料理が適切であれば、一種の珍味として捨てがたい。柔らかい葉を摘み、薄いころもをつけて天ぷらにすると、臭みは全くなり珍味に生まれ変わる。地下茎からは澱粉がとれ、味はないけれど、かつて島根県では食用にしたという。

このように葉と地下茎が役立ち、いつでも容易に採取できるので、救荒植物でもあった。また葉は乾燥すると臭気はなくなり、干して‘どくだみ茶’ができる。

ドクダミは意外にも有用性が高いのだが、また嫌われることも多く、そのためか地方の方言名も多岐にわたり、本州、四国、九州で221種類にも及ぶ。その一部を取り上げてみると、

①悪臭に因んだ方言名

くさいば	岐阜県(稲葉)
へぐさ	山梨県(西田川)
へくそかつら	大分県(大分市)
へひりぐさ	大分県(大分)
いぬのへ	青森県(中津軽)、秋田県(北秋田)、熊本県(阿蘇)
かみなりのへ	静岡
おしょうさんのしりふき	大分県北海部

②活用から生まれた方言名

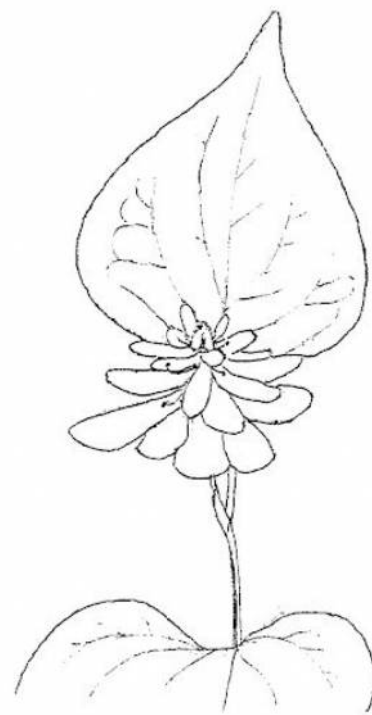
どくだみ	毒矯の転化 江戸
いしやころし	医者殺し 大分県(大分市)
すいだしぐさ	湿疹、虫刺され、皮膚病の治療 島根県(美濃、益田市)
じゅうやく	十薬の意

近江坂田、熊野、宮城県(仙台市)、秋田県(雄勝)、山形県(東置場)、埼玉県(川越)、東京都(南多摩)、神奈川県(津久井)、新潟県(佐渡)、福井県(今立)、静岡、三重県(志摩、度合)、滋賀県(甲賀)、京都府(京都市T)、大阪府(豊能)、奈良、和歌山県(海草、有田、日高、東牟婁、西牟婁)、兵庫県(津名、三原)、島根県(美濃、那賀、仁多)、山口県(大島、玖珂、佐波、吉敷、厚狭、大津、阿武)、岡山県、徳島県(美馬)、香川県、愛媛県(北宇和)、長崎県(対馬、下県)、大分

標準和名ドクダミは「毒をためる」の転化だという。「矯める」は「改めて治す」『正しくする』といった意味である。

一方、花を愛でることもあって、情趣を漂わせる白花は、活けると一層味わい深く、切花としても役立つ。白く花卉のように見えるのは総苞で厚みがある。その厚みが効を奏し、純白をより引き立てているのであろう。

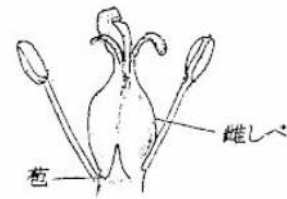
毒だみの十字花白く咲くみちに 水流れゆくをしみじみと見つ 松村満雄
青臭ふどくだみの花芯立てて 咲き群るかな昨日も今日も 宮 柊二



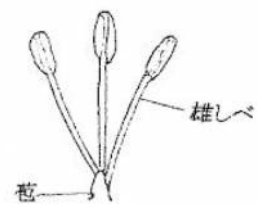
ヤエドクダミ

花粉に関係なく
種子ができる
(単為生殖)。
不稔性のものが
なく、すべて結実
する。

雄しべは3本で
あるが、しおれて
花粉はできない。



両性花



雄花

因みに、花の中心の棒状の芯は、小花が多数密集している短い茎で、つまり花序である。花柄のない花が付いている花序を‘穂状花序’と称し、ドクダミの花序は短くて解りにくいが、草本ではオオバコやイノコズチめ花序も穂状花序で、長いので理解しやすい。木本類ではヤナギ属、ハンノキなどが、穂状花序である。

雄しべのように見えるのは両性花と雄花の小さな花である。1個の両性花は1個の雌しべと3個の雄しべがあり、花被も蕾もなく、花の柄もない。ただ、小さな苞葉がある。

柱頭は三裂し、したがって‘基本数は3’である。基本数3という仕組みは単子葉類では当然であるが、双子葉のドクダミにみられるのは奇遇である。

無花弁は古代植物の特徴の一つでもあり、ニレ属、ヤナギ属、マンサク属などが、古代植物と考えられている。いずれも木本類で、草本類は化石として残らないためか、考察困難である。その中で草本のドクダミは、生きていた古代植物と考えられている。

白い4枚の総苞片は長さ1.5~2cmの長楕円形で、長さがそれぞれ異なる。長いものが1枚、それに向き合っている1枚は最も短く、左右に開いている2枚は、中間の長さである。4枚の総苞は、まさに十字架の形をしている。

どくだみや 真昼の闇に白十字

茅社

総苞片は野生のドクダミは4枚であるが、多数重なっているものもある。また葉に斑の入っている園芸品種があって、これらは物好きの庭に植えられている。

① ヤエドクダミ H. cordate f. plena

普通のドクダミは花序のいちばん下にある総苞片4枚しか大きくならないが、八重のドクダミはそれぞれめ花の色が・生長し、多数重なって見える。10~20枚ほど重なり多いものは大小40枚もある。

八重どくだみの中には、白い総苞片の一部に緑色の斑紋が入って斑模様になっているものもある。もとより白い総苞片は葉から変化したものであるから、緑色の斑紋はその証である。

② ニシキドクダミ H. cordate f. variegata

葉に黄斑冬赤斑がある。葉裏が赤味がかかったものもある。

振り返ってみると、ドクダミは古くから暮らしに溶けこんでいる植物で、嫌われながらも一方で大切にされている。こんなにも好き嫌いの極端な植物は珍しい。

花の精がいるなら、人の無粋に立腹かもしれない。

参考文献 (ドクダミ)

日本草本植物総検索誌 I 双子葉編	杉本順一	P. 30	1965
生きていた古代植物	田村道夫	P. 30	1974
世界の植物朝日百科 6 7	(山崎 敬)	P. 1596	1977
日本の野生植物 II	(靱山泰一)	P. 98	1982
牧野新牧野催物図鑑	牧野富太郎	P. 169	1989
園芸大事典 2	(小学館)	P. 1597	1994
語源をさぐる	新村 出	P. 156~157	1995
日本植物方言集成	(八坂書房)	P. 373~376	2001
植物民俗	長渾武	P. 130. 183. 301	2001
道端植物園	大場秀章	P. 77~84	2002

観察余適 No50 2021 6.16 渡嘉敷